

ビジネス フォーカス

【日本語と英語の「損得」】
【入力にまつわる機会損失】

の英語の読み書きはできるが、日本語の方が格段に身に付いている。それでも、英語の方が断然早い。英語の場合、基本的に次から次へと打ち込んでいくだけで済むからである。実に手離れが良い。

一方、日本語は「音読みで入力し、漢字変換し、必要に応じて音節を調節し、適切な結果を探す」という動作をせねばならない。

このややこしいプロセスが、一体どれだけの不利益をもたらしているのか推計してみたい。

日本のホワイトカラー人口は、およそ3千万人だという。各人が1日1時間の日本語入力をすると仮定しよう。年間の労働日数を240日とすると、日本のホワイトカラーは総じて、1年間に72億時間、仕事で日本語入力をしている勘定になる。

筆者は日本語か英語でメールやメッセージを書くが、どちらか選べる相手であれば、英語を選ぶ。入力が圧倒的に早いからだ。感覚的には倍、もしくはそれ以上早いと思うこともある。

筆者が特段英語にたけているという論旨ではない。ひと通り

めな数字と感じる）。つまり、年間7・2億時間である。

日本の労働生産性は大体時間当たり4300円程度であるから、これを掛け合わせた金額、すなわち3兆960億円が、漢字変換や音節調整などに費やしている機会損失と考えうる。

文科省関連の総予算が5兆円、一般会計の税収が40兆円、消費税1%当たりの税収が約2兆円などと言われている中で、これは莫大な規模ではないだろうか。

加えて、日本語にまつわる「機会損失」は「入力プロセス」にとどまらない。「入力しづらい言語であるがゆえ、入力されない」という循環となるからである。つまり、入力される情報量が少なく、よって利用できる情報も少ない、という事態である。

言語の選択は記事のサイズに比例することになる。

言語の選択は民族の尊厳に関わる一大事で、経済的な損得のみで判断すべきだと主張する意見はない。ただ、われわれがよつて立つインフラのコストや効用に無関心であれば、グローバリゼーションの適者生存という無情な法則を前にして、あまりに危ういのではないだろうか。

(矢野経済研究所)

取締役 矢野 元

一方で日本語は64万にとどまる。実際に5分の1しかない。

少ないのは記事数だけではない。平均的な記事の長さの統計などが見当たらず、記事の質まで評価するのは難しいが、例えば典型的な例として「GDP」というキーワードで英語と日本語の記事を比較してみよう。

英語版の「GDP」は印刷ページ数にして18ペー、日本語版は

5ペーにすぎない。量が多ければよいわけではないが、質がある程度一定であると仮定すれば

情報量は記事のサイズに比例することになる。

言語の選択は民族の尊厳に関わる一大事で、経済的な損得のみで判断すべきだと主張する意見はない。ただ、われわれがよつて立つインフラのコストや効用に無関心であれば、グローバリゼーションの適者生存という無情な法則を前にして、あまりに危ういのではないだろうか。